

再建主義ウォッチング掲示板 過去ログ

2004年3月12日(No.1)～24日 (No.61)

米国のキリスト教新右翼思想である「キリスト教再建主義」(Reconstructionism, Dominion Theology, Kingdom Now Theory, Theonomy) に対して、真剣な憂慮を表明する立場に立つ人たちのための、情報交換・意見交換・問題提起のための掲示板です。なお、この掲示板の趣旨と関係がないと管理者が判断した書き込みについては、書き込んだ方への事前の承諾を求めずに、一方的かつ独断的に削除することがありますので、ご了承ください。

[再建主義ウォッチング掲示板 現行ログ](#)

■61 ストレイシープさまへ、ふたたび
ストレイシープさま、曰く

[山谷](#) - 2004/03/24 14:06 -

>富井先生、分かりました。確かにロバート・シューラーを誉める
>人の神学的立場は明白ですよね。病人が医師を裁くようなもので
>す。やっぱり山谷大尉というか、このような人物を「大尉」とい
>ただく救世軍の神学はおかしくなっているのでしょうか。

しかし、ストレイシープさまは、この「再建主義ウォッチング掲示板」において、ロバート・シューラー師についての発言をしたのが、山谷ではなくハンドルネーム「ソソ」氏の2004年3月19日の発言(ログNo.25)であることを、自分で見て、読んで、知った上で、引用したはず

です。
山谷は、シューラー師については、巨大なガラス製の教会の牧師である、ということしか知らず、シューラー師の著作については、一度も読んだことがありません。

ですので、知らないものを、誉めることは、出来ないわけです。

よって、ぜひ次のように訂正していただきたいものです。

山谷はロバート・シューラーを知らないようなので、その神学的立場は、いまだ、明白ではない。しかし、確実にひとつ言えることは、山谷は「前千年期再臨説のウェスレアン・アルミニアンである」ということである。

さて、このように正確に訂正してくだされば、ストレイシープさまの言われる「神学的に病んでいる」という文脈は、ひとりウェスレアン・アルミニアンの救世軍だけに留まらず、メソジスト、ホーリネス、ナザレン、インマヌエル、キリスト兄弟団、ウェスレアン・ホーリネスなど、メソジスト系・ホーリネス系諸教団にも当てはまることになり、それらすべてが「病んでいる」ということになるで

■59 剣

[山谷](#) - 2004/03/24 11:44 -

富井氏が、中間領域の天使的勢力を否定するために、新約聖書における「剣」という言葉の釈義を問題として提示しているようです。

> 「剣」は、新約聖書において「御言葉」を象徴しています。

しかし、新約聖書において、いつも・つねに・かならず「剣は御言葉を意味する」のであるなら、ローマ13:4における次の命題的聖句はどうなるのでしょうか？ すなわち、

彼（国家権力）はいたずらに剣を帯びているのではない。
彼は神の僕であって、悪事を行う者に対しては、怒りを
もって報いるからである。

これに上記の解釈原則を適用するならば、「国家は御言葉の役者である」というのが、論理的結論となってしまいます。これでは、皇帝教皇制度の東ローマ帝国のような国家教会になってしまい、国家と教会の機能を区別した改革派神学からは、大きく逸脱することになってしまいますが？

このような論理矛盾を回避するためには、「天使の手の中にある剣は、国家権力を指す」「御子の口の中にある剣は、御言葉を指す」という、聖書テキストと完全に整合性を持った解釈原則を採用しなければなりません。そうであってこそ、真の前提主義が立つ、というものでしょう。

■58 再建主義は「再編集」して用いられる

自由キリスト者 - 2004/03/23 17:46 -

山谷様、レスありがとうございました。

完全に信じ込んでいる人を論破することは、誰にとっても難しいことです。信じ込みの激しい人は、たとえ論破され、議論に負けても、そんなことには関係なく自分の教義を信じ続けるものですから・・・。

アメリカで政治上の保守派が、再建主義の考えのいくつかを引用して、再建主義を「再編集」するかもしれませんが、その当人として、再建主義の全てを受け入れはしないでしょう。再建主義には、ノンクリスチャンのマキアベリストたちにとって都合のよい思想が、宝石のようにたくさん散りばめられています。再建主義は、結果としてそういった策士たちに格好の材料を提供しているわけで、策士たちは再建主義をこれからも、自分たちの都合のよいように「再編集」し続けるにちがいありません。自分たちには、真面目なクリスチャンになる気などかけられないくせに、です。そして、このような人々の活動によって、再建主義は世の人々に悪い印象を持たれてしまうようになります。

■57 自由キリスト者さまへ

[山谷](#) - 2004/03/23 16:22 -

再建主義者は、聖書以外のいかなる前提も認めませんので、リベラル神学は再建主義者を論破することは、不可能なのです。

再建主義者と議論するためには、「前提主義」という、同じ土俵に立たなければならないのです。なぜなら、それ以外の思想的立場を、再建主義者は絶対に認めないからです。

今回の議論で、わたしは、逐語靈感説と前提主義という土俵に立って、どこまで再建主義を反駁することが可能かを、試みているところです。

富井氏によれば、山谷は前提主義という土俵に立っていない、と断定されてしまっています。わたしとしては、聖書テキストに即して、また、聖書テキストを理解する鍵である新約聖書神学に依拠して、議論を進めてきたつもりですが、富井氏の目から見れば、まだまだわたしは

「前提主義」に徹し切れていないようなのです。

というわけで、自分の議論のどこが「聖書テキストのみに立脚する」という大原則から外れているのか、もう一度精査しようと思っています。

しかし、わたしとしては、一般恩恵と自然法と中間領域（天使的勢力）をまったく度外視して体系を構築しようとしている再建主義者の方こそが、前提主義に徹し切れていないのではないかと、という確信を、いよいよ深めているところではあります。

なお、自由キリスト者さまの言われるように、「受肉」と「再臨」を否定してしまうと、この世界は論理的に言って「自律した自然のみ」ということになり、その結果、意味を見出すためには、信仰による飛躍によるしかない（理性からの逃走）という結論に至ってしまいます。これは、神秘的宗教体験、オカルト、麻薬などによる大脳皮質におけるトランスパーソナル体験によって、意味を獲得するという、病める現代人の姿そのものを、意味します。

そうなりますと、実は、再建主義者の側の議論の方にこそ、利することになってしまうのです。

墮胎者の処刑という「自然と恩寵の調和」を、最終的回答として選びたくないのであれば、わたしたちは、どうしても「受肉」と「再臨」による「自然と恩寵の調和」という回答を、固く保持し続けなければならないのです。

■55 ストレイシープさまの閲覧を禁ず。

自由キリスト者 - 2004/03/23 00:40 -

特になし。

■54 結論・再建主義には力はない

自由キリスト者 - 2004/03/23 00:37 -

・・・というわけで、簡単な結論になりますが、再建主義者に神の力が特別に注がれているということはない、ということで、話を終えたいと思います。世俗の人はパーシャルとかフルブレテリズムとかの議論を耳にしても「バカじゃないの」と感じているに過ぎませんが、福音派のクリスチャンは、再建主義を必要以上に恐れ、その独裁的雰囲気にも鳥肌を立てているわけですね。

しかし、ハッキリ申し上げて、その独裁的雰囲気は再建主義者自身を苦しめる力しかありません。私など、自由主義ですから、最後の審判も、キリストの再臨も全く信じていませんし、それらは神話として因果応報的な意味しか含んでいないということを理解しています。マリアはローマ兵に強姦されて私生児イエスを生みました。それが後に美化されて「処女降誕」の物語を生んだのです。聖書がこのような美しい話でマリアを飾ってくれている。そのことに罪の許しの意味深さを、そして神の配慮を感じるのであります。というわけで、私はみなさんに、正統主義の放棄をお勧めしたいと思います。では・・・。

■53 再建主義が限度を越えて拡大することはない

自由キリスト者 - 2004/03/23 00:13 -

再建主義の狂信的宇宙観は、キリスト教の「狂気」の部分が最も端的に現れたものだと言えます。再建主義は、キリスト教の闇の部分の再建、狂気の部分の再建なのです。

ですが、世界は別段驚きません。似たような狂気は他にもたくさんあるからです。エホバの証人や統一教会、そして前者に比べれば多少穏やかなモルモン教徒・・・こういった狂気は、いつの時代も一部の物好きによって信奉されています。

再建主義は、いわゆる異端ではないにしても、こういった狂気の一つであり、それを好む人が

集まる自慰集会なのです。

これからの時代の人々は、それぞれが自分の信じたいことを信じるという精神的スタイルをとると思います。それぞれが信じたいことを信じて進むが、なぜかバラバラに進んでいるようでそれなりに思想の様式が似ているというふうになっていくのが21世紀の信仰的精神であると思います。

その中で、特殊な方向に進んだものが、再建主義や、急進的なカルヴァン主義、ペンテコステの熱狂、エホバの証人への没頭という形をとるのです。ですが、これらは、どんなに頑張っても、多数派になることはできません。それが世俗的な民主主義社会というものです。

正統主義は、昔は主流であったと言われますが、それは聖職者や神学者の間で主流であったということなのであって、民衆は迷信や魔術的なものも信じていました。反抗したら面倒なことになるので、みんなは黙っていたのです。しかし、心の中ではいろいろな形而上学が考えられていたはずで、聖職者がどんなにいばっても、心の中は自由なのです。昔はみんな正統主義を信じていたというのは、聖職者の幻想に過ぎません。事実、正統主義が完成の域に達した頃、民衆は皆、宗教的無関心に陥っていたのです。

再建主義者は、エマソンでも読んで、頭をやわらかく保ったほうがよいと、私は思うのであります。

■52 再建主義の問題は、キリスト教自体の問題である 自由キリスト者 - 2004/03/22 23:29 -

私はリベラルな立場を支持する者です。

この掲示板その他を読んでみまして、再建主義の問題は、そのままキリスト教自体の問題であると思いました。

聖書をそのまま文字通り信じる立場というのは、何も再建主義ばかりではなく、正統を自負するキリスト教なら、みなそうでありましょう。ですが、問題はすべてここにあるのです。

聖書を唯一の基準とする前提自体が誤っているわけで、逐語靈感とか、十全靈感などといった幻想を放棄すれば、我々はもっとのびのびと自由に思考できるはずです。

今更、再建主義を叫んで、古い非人間的なピューリタンの信仰を復活させても無意味です。むしろ、神学や教義を越えた善なる神に信頼し、学問的に幅広く、そして合理的に考えたらよいと思います。

21世紀の始めは再建主義が台頭して色々な問題を起こすでしょうけど、これによって、逐語靈感説の聖書主義自体が誤謬であることが歴史において暴露されることになると思います。

誤謬は、ハッキリした形で現れなければ、決して除去することはできないのです。私は、自由主義を採用してなお堅く神に信頼している人を知っていますが、そのような人こそ、ほんとうのクリスチャン、ほんとうの信仰者であると思っています。

■51 ストレイシープさまへお願い 山谷 - 2004/03/22 16:16 -

「ソソ」という人の発言を、ミレニアム掲示板でさも、山谷の発言であるかのように意図して引用するのは、やめていただきたいと思います。おかげで、富井様は、山谷がロバートシューラー氏の信奉者であると、すっかり誤解してしまったではありませんか。

なお、富井氏は、かぶり物と天使についての解釈を、いまだに山谷のオリジナルだと思ってらっしゃるようですが、そんなはずがないではありませんか。わたしがその解釈を学んだのは、フランススコ会訳新約聖書の脚注からです。一コリント11:2-16の箇所（6）をぜひお読みになってみてください。新約聖書神学によってきちんと学問的に支持されている解釈であると、おわかりいただけることでしょう。

■50 工兵さまへ 山谷 - 2004/03/22 15:48 -

中間領域と言う場合、わたしはここではもっぱら、分離した自然と恩寵の間で緩衝地帯として機能している、領域主権の天使的勢力のことを考えているわけです。

そうして、パウロ的には、この中間領域の天使的勢力の中に、異教の神々とされるところの諸霊、律法制定の仲介者・後見人・養育係である諸霊なども、ひとくくりにして入れているようなのです（コロサイ書、エフェソ書、ガラテヤ書等を参照）

ところが、工兵さまがこれまで論じてこられたのは、もっぱら「キリスト者の内面における中間領域の有無あるいは是非の問題」なのです。

これは、組織神学の部門で考えるなら、わたしが論じている「国家権力と天使的勢力の問題」については「摂理論」で取り扱うことになり、工兵さまが論じている「キリスト者の内面における神の意志と人の意志の調和」については「聖化論」で取り扱うことになると思うのです。ですので、工兵さまが言う「中間領域」は、聖化論における、キリスト者の内面における「自然と恩寵の調和の問題」と言い換えた方が、より適切ではないかと思います。

工兵さまが言われて来たように、キリスト者が最終的に目指すところは、自分の内面において「自分の意志と神の意志が完全に調和し、それがひとつの愛の行為となって、外面に表現されること」です。もちろん、そこに、中間領域があろうはずがありません。

自分の意志が「自然」であり、神の意志が「恩寵」であるとするならば、この両者の調和は、キリストの受肉によって、人類にもたらされる、ということになります。

キリストはその受肉において、人性（自然）と神性（恩寵）が結合され、「神人二性一人格」（両性論）となりました。このキリストの内面においては、「人間の意志」（自然）と「神の意志」（恩寵）とが、二つとも存在し続けているのですが（両意論）、しかし、キリストの人格においては、人たるキリストの意志と、神たるキリストの意志が完全に協力し、一致し、調和しているのです。この自然と恩寵の一致が、人格を通して、また、行為を通して外面に表現されると、対象からは「愛」として認識され、理解されることになります。

キリスト者は、キリストに結合され、一体化されることによって、キリストの命に参与することになるのですが、しかしそれは、キリスト者までもが神人二性一人格である、三位一体の第四位格になる、というような意味ではありません。ですので、「両性論的文脈」でキリスト者の聖化を考えるべきではない、ということになります。

しかし、「両意論的文脈」でキリスト者の聖化を考えるのであれば、キリストの内面における人の意志と神の意志の完全な調和と一致が、聖霊を通して、キリスト者の中にコピーされる、あるいは、聖霊が、キリストの「人の意志と神の意志の調和」というかたちをキリスト者のうちに作り込む・かたちづくる、それが聖化だ、と考えることが出来ます。

上記の考え方であれば、ウェスレアン・アルミニアンだけでなく、晩年にオールド・サルティス（救済の順序）の考え方（特にウニオ・ミスティカー神秘的合一）を放棄したと言われるカルヴァンや、属性の融通を否定するカルヴァン派の立場からであっても、同意を得られると思います。

■ 49 悩める羊さまへ

山谷 - 2004/03/22 15:46 -

（3）カルヴァンの表現によれば

「キリストのからだ」は、自然と恩寵が調和した秩序ですし、「国家権力」は、分離した自然と恩寵の間で緩衝地帯として機能する秩序ですが、共にキリストの頭首権に服しているという意味では、同じになります。そこで、カルヴァンは、教会と国家を「右目と左目」というふうなたとえています。

もちろん、スコラ神学を否定したカルヴァンは、意識的に天使論を排除したわけですが、天使的勢力による領域主権という概念を、一般恩恵と自然法という概念に置き換えて、論じています。初代教父アレクサンドリアのクレメンスは、天使的勢力と一般恩恵と自然法を同じ次元で論じていますから、おそらくは、交換可能な概念なのでありましょう。

そのカルヴァンは、国家権力について、次のように述べています。

この世の政治は、神の摂理と聖なる指定に基づく。（カルヴァン著作集）

国家権力は、神からの委託を持ち、神的な全権を付与される。確かに彼らは神の代理をなし、ある程度まで、神の事柄を遂行する。（カルヴァン著作集）

国家権力は、神と人間との間に場所を占める。（キリスト教綱要）

政府の職権はイエス・キリストが神の右に座したもう事に基づく（宗教改革者著作集カルヴァン集）

上記で興味深いのは、カルヴァンが政治を「神の摂理」の中に位置づけている点です。天使論は、組織神学の中で「摂理論」において取り扱われるものですので、神学的に「天使論」と「国家論」は近接する領域として、あるいは、新約聖書神学的には複合する領域として、あるいは、オスカー・クルマン的には同一の領域として、論考されるべきものなのでしょう。

■48 悩める羊さまへ

山谷 - 2004/03/22 15:44 -

（2）教会と国家との関係について

アダムの墮罪によって自然と恩寵が分離したことが、歴史の開始であるとする、「歴史とは国家権力の歴史である」と見る見方も可能になります。なぜなら、分離した自然と恩寵の間にあって、緩衝地帯として機能するのが「中間領域における天使的勢力」つまり「位・主権・支配・権威の天使＝領域主権＝国家権力」ということになるからです。

自然と恩寵が分離した状態にあっては、人間は道を誤って、盗み、奪い、殺し、略奪し、不正を働き、自然の秩序を乱し、犯すなど、さまざまな犯罪を起こしてしまいます。これに対して「国家権力」は、神から委任された権威に基いて「善を勧め、悪を罰する」ことによって、秩序を維持し、人間が平穏な社会生活を営むことが出来るように、保障するのです。

しかし、自然と恩寵の乖離状態が、何らかの仕方で克服されるのであれば、そもそも、中間領域が存在する必然性もまた、解消されてしまうのです。

この「自然と恩寵」の調和は、イエスキリストの受肉によって歴史の中に突入して来ました。受肉の出来事は、終末論的な出来事なのです。キリスト初臨によって、歴史の中に、自然と恩寵の調和が突入し、こうして歴史はすでに「終末論的段階」へと入っているのです。

そうして、キリストを主と告白し信じるキリスト者は、キリストと結ばれて一体となり、聖霊

の内住によって「キリストに似た者」へと聖化されて行きます。また、すべてのキリスト者は、キリストを頭とする宇宙的な「キリストのからだ」を構成します。これは、歴史の中に出現した「自然と恩寵が調和した新経綸の秩序」です。

「キリストのからだ」に結ばれている者たちは、ヨハネの手紙で言われているように、愛に生き、罪を犯さず、また、罪を犯すことが出来ないのも、その意味では、もはや「国家権力は不要」ということになります。なぜなら、罰せられるべき悪を行う者が、「キリストのからだ」においては、いなくなるからです。

しかし（ここが難しいところですが）、キリスト者の聖化は漸進的な過程であり、また、その過程から脱落することもあり得ますので、犯罪を犯して、「キリストのからだ」から切り離される人々も、残念ながら、存在しています（キリストのからだから切り離すという教会戒規が、コリント書に書かれています）これは、キリスト者の聖化が、まだ栄化という最終的完成段階に達していないために起こる、残念な事態です。（カルヴァン派であれば、もちろん、キリスト者が墮落して犯罪を犯したということにはならず、当事者が有効召命を受けていなかったのだ、という説明の仕方になります。が、教会内から犯罪者が出るという事実を説明している点では、同じことになります）

一方、いまだ福音を聴かず、福音を聴いても受け入れず、そのために、「自然と恩寵の調和」（キリストの救い）に参加していない人々が（あるいは、キリストのからだに加えられていない人々が）、世界人口の多数を占めているわけですから、当然のことながら、さまざまな犯罪が発生するわけであり、そこに「国家権力」が使命を遂行し続けなければならない必然性が依然として存在し続けるわけです。

そういうわけで、キリスト初臨と再臨の中間時においては、「キリストのからだ」という新経綸の秩序（自然と恩寵が調和した秩序）と、「国家権力」という旧経綸の秩序（分離した自然と恩寵の間にあって緩衝地帯として機能する秩序）が、共存するという事態になっているのです。

□41 悩める羊さまへ

山谷 - 2004/03/22 13:53 -

（1）天使の墮落の時期について

わたしの考えでは、アダムの墮罪によって自然と恩寵が分離した瞬間から、「歴史」が始まったのだと思います。そうして、自然と恩寵の間にあって緩衝地帯として機能するために「中間領域」が、神によって設置されました。

中間領域とは、命の木（恩寵）に至る道を守るために設置された「ケルビム」（天使的勢力）と、ケルビムの手に握られた「剣」（国家権力）です。

問題を複雑にしているのは、天使的勢力の三分の一が神に反逆して、悪鬼化した、ということです。天使の墮落という出来事が「何時、どこで」と問えるような、歴史的な文脈におけるものであるのか、それとも、自然と恩寵が分離する以前の、超歴史的な文脈あるいは原歴史的な文脈におけるものであるのか。これに答を出すのは、なかなか難しい問題です。

初代教父（パピアスなど）は、世界創造以前におけるサタンと天使の墮落を考えていたようですから、「生活の座」（ジッツ・イン・レーベン）の解釈法で行けば、少なくとも新約聖書については、そのように（世界創造前墮落説）考えるのが妥当なのかもしれません。

あるいは、サタンの墮罪だけが世界創造以前に起きたのであり、それに追従した他の天使たち

の墮落については、創世記第6章の記述において、つまり、歴史的文脈において起きた、と考えるのも、もうひとつの可能な考え方だと思います。

■40 偶像礼拝を行え？従う？

工兵 - 2004/03/22 06:47 -

世にもろもろの偶像がある。それを無視しては生きることが難しい現実があり、悲しさもある。

もし国家の「偶像礼拝行え」という命令に「従う」とき、あるものは靈魂の呵責を生じさせるだろう。それは、神に申し訳ないという自らの責めだ。

偶像を介してでなくとも、神に従わない者は罪人である。

ならば「行え」という命令に「従う」結果となった人々もそのことで罪人とせられるのか？

健全な信仰者は、意図的に偶像を拝しない。

あるものは「行え」という命令を自らの命をもって拒否した。

しかし、拒否することをえらばなかった人々もいた。

神は偶像以上のものである。拒否できた力、勇気をそなえた聖者はまことに神の矜持である。しかし一方、無力であること、無抵抗であるところにも神の力があらわれよう。それは神の慰めである。

人にとって「従う」とは何であろうか。

み心になるようにと、祈ることではないか。

「ここも神のみ国なれば」とあるように、信仰により、また恵みによって人の内に御霊が住まれ、神の国、神の宮とせられる。

そこには、中間領域はないだろう。イエス・キリストによってもたらされた十字架の仲介のみがあり、み心になることのみを願う祈りしかなく、常に内的に神と一致している状態であろう。

信仰的願いと、神の恵みとが無理なく整合されている状態であろう。

イエスに倣うということは、イエスの生き様、いさぎよさを倣うことでもある。「従う」ということがらについて、イエスから学ぶことは厳かである。なぜならこの方は、天上の玉座におられたキリストでありながら、弟子の足をも洗われたのだから。

■39 あれ？

悩める羊 - 2004/03/21 22:29 -

すみません、なぜか、同じモノが投稿されてしまいました。削除しておいてください。

■37 え〜と

悩める羊 - 2004/03/21 21:56 -

山谷先生、さっそくのレスをありがとうございました。

え〜と、ひとつご確認させてください。

(1) の回答で「サタン以外の天使的勢力については、ユダ書の記述から、創世記6章がそれに該当するであろうと推測します。」とあります。するとこの時期はノアの洪水の少し前となるわけですね。一方で(2)の回答において、「天使的勢力の三分の一が何時墮落したかについては、聖書に明言されていません。」とありますが、すると(1)の天的勢力の反逆と(2)の1/3の天使たちの反逆は異なる事件であったとなるわけでしょうか？

またエゼキエル28章にいた油注がれたケルブは墮落以前のルシファーのことと思われますが、このエデンとは、アダムとエバのエデンと同一なののでしょうか。私はどうも違うように思われ、アダムとエバ以前にサタンの反逆があり（だからすでにヘビがそこにいた）、その時に1/3の天使が従ったと推測されるのですが。

<国家権力=天使的勢力>であり、限定的ながら、私たちクリスチャンもその天使的権威に服するとなりますと、教会の肢体としてキリストの頭首権に服することとの関係はどうなるのでしょうか？つまりクリスチャンに対する国家の権威とキリストの権威との関係はいかに、という疑問なのですが。これも恩寵と自然が乖離するとか一致するとかの話になるわけでしょうか？

キリストの頭首権が天使的勢力によってバッファーされて私たちに伝達されるという考え方は少々理解しがたいのです。国家権力はある意味で便宜的な権威の系統であって、本質的にはキリストの権威の直接統治の下にクリスチャンはいると考えますが。

□36 応答をありがとうございました

kamekame - 2004/03/21 18:32 -

山谷先生、いろいろと教えていただきありがとうございました。

残念ながら、「中立」の天使については私にとっては謎のままですが、あんまり考えすぎても体に良くないので、この辺で休もうと思います。

今後は、アドバイスの通りに、「武装解除」という概念をテーマにコロサイ書全体を気長に研究したいと思います。

聖書って、本当に深いですね。

これからもエンジョイ、バイブル・スタディ・ライフと行きましょう！！

□35 悩める羊さまへ

山谷 - 2004/03/21 12:48 -

(1) 初代教父の中には、サタンの墮落を世界創造の前に位置づけ、あるいは、間隙説と関連して、サタンの墮落に関わる宇宙的な大闘争によって「旧宇宙」が破壊された（ペテロ書の古い世界は水によって滅びた、という記述がこれを指す）と考えた教父もいたようです。わたしは、サタンが何時の時点で墮落したかは、聖書に明言されていないと考えますが、すくなくとも、サタン以外の天使的勢力については、ユダ書の記述から、創世記6章がそれに該当するであろうと推測します。

(2) 天使的勢力の三分の一が何時墮落したかについては、聖書に明言されていません。

(3) 聖書を見る限り、少なくとも天使長と天使と大天使という三つの階級を見ることが出来ます。後期ユダヤ教神学では、細緻な天使論が発展し、スコラ神学はそれを継承しました。

(4) キリストは、十字架と復活によって天使的勢力を打破し、キリストに従属させましたので、構図としては、キリストが頭首権を持ち、そのキリストのもとにあって、領域主権の天使的勢力が地上を統治している、という図式が考えられるでしょう。その意味では、国家権力＝

天使的勢力は、悪を罰することに限り、キリスト・神の代理人であると言えるでしょう。ただし「悪鬼的性格を潜めた代理人である」ということを、忘れてはなりません。

☐34 すみません、ちょっと割り込みます

悩める羊 - 2004/03/21 10:04 -

前々から気になっていたことで、今回関係することが出てきたので、割り込みですみませんが、質問させてください。

(1)
大尉殿は

4. 領域主権を担う天使的勢力の一部は、墮落して、悪鬼化した。こうして、国家権力の悪鬼的性格が顕現するようになった。

と言われ、いわゆる墮落天使の誕生の時期を創世記6章にありますが、ではサタン（ルシファーの反逆）の起源はいつなのですか。つまりすでに罪を犯す前のエデンにヘビはいたわけです。

(2)
しばしば天使の1/3がルシファーに従ったと言われますが、この反逆の時期はいつなのですか？

(3)
現在中間領域を満たす存在は、天使と墮落天使であり、後者の頭がサタンであり、階層（救世軍の職位のように）をなしていると考えていいのでしょうか？

(4)
大尉殿は「中間領域」の天使的充満を言い、再建主義はそこにヒューマニズムが入ると、ここが論点の本質と見えますが、すると大尉殿の説ですと、再臨までは人に対する神の統治はこの「中間領域」をバッファー（緩衝）として、天使を通して間接的であるという訳でしょうか？しかしイエスは自分に天と地のあらゆる権威は与えられたと言っています。これはどう解釈すべきでしょうか？

よろしくご教授くださいませ。

☐33 kamekameさまへ (3)

[山谷](#) - 2004/03/21 06:59 -

「中立」という概念が受け入れ難いのであれば、「武装解除された」という、より聖書的概念をたよりに考えて見られてはいかがでしょう？

英語で「中性化する」は「ニュートラライズする」であり、それはまた、「武装解除する」という意味でもあるからです。

神に敵対していた天使的勢力が、キリストの十字架と復活の勝利によって、打ち破られ、武装解除され、キリストに対して従属させられました。これが、「ニュートラライズ」です。

問題は、武装解除されたものの、キリストが再臨するまでは、天使的勢力は存在し続け、領域主権を支配し続けている、ということです。なぜなら、キリストの十字架と復活の勝利後も、「この世の君」は活動しているとエフェソ書で述べられており、領域主権の天使である「位、

主権、支配、権威」が滅ぼされるのは、キリスト再臨のときであるとコリント書で述べられているからです。

そうしますと、神に対して反逆的であった領域主権の天使が、キリストの十字架と復活の勝利によって打破され、武装解除されたが、しかし、キリスト再臨までは、「キリストに従属する者」として、領域主権を統治し続ける、という構図になります。これは、永続的な構図ではありませんから、「中間時の中間領域」と呼ばれるわけです。

しかし、ニュートラライズされたものの、天使的勢力は、本心では、キリストに対する従属から解放されたいと願っているのです。それは、詩編第2編で次のように言われている通りです：

我らは、枷をはずし
縄を切って投げ捨てよう

しかし、神の御心は、最終的にはすべての領域主権を御子イエス・キリストに与えて、御子が直接統治することにあります。

主はわたしに告げられた。
「お前はわたしの子
今日、わたしはお前を生んだ。
求めよ。わたしは国々をお前の嗣業とし
地の果てまで、お前の領土とする。
お前は鉄の杖で彼らを打ち
陶工が器を砕くように砕く。」

「剣」（国家権力）によって統治する「位、主権、支配、権威」に代わって、御子イエス・キリストが「鉄の杖」をもって、地上を直接統治するようになりますが、それは、キリストの再臨によって起こります。それが成就するのが、ヨハネの黙示録19:15です。

自ら鉄の杖で彼らを治める。

□32 「中立」を保つ天使に対しての疑問

kamekame - 2004/03/21 05:48 -

山谷先生、応答をありがとうございます。
しかし、山谷先生の書かれていますことが私にとってははじめて出会う考え方で少々驚きがあります。続けて質問をさせてください。

「中立」を保つ天使としてあげておられる例ですが、まず「主からの悪霊」という表現ですが、これはサウルを悩ませた悪霊のところで使われている表現ですね。

16:14 「主の霊はサウルから離れ、主から来る悪霊が彼をさいなむようになった。」

なぜ、そうなったかという、神様に従えなかったからですね。

ここでの悪霊の働きは「神から下された命令に不承不承であっても（いやいやながらであっても）従わざるを得ず」という性質のものではなく、神に従わない人間を悩ませ、ねたませ、人殺しまでさせようとするというのは悪霊の本来の働きではないかと思うのです。悪霊が喜んですることだと思います。

ですからここで「神からの」という表現は「中立」をさしているのではなく、神に従わない人間に対して、神がその敵、悪魔、悪霊からの守りの手を引かれて、悪に引き渡されたということを表現しているのだと思います。

ローマ人への手紙

1:28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。

これと同様の行為だと思われます。

また「神の許可のもとにヨブを苦しめるサタン」ですが、これも「中立」を表現しているとは思えず、「神の許可の範囲でしか悪の活動ができない」という悪魔の基本的な性質だと思います。なぜならば神は全能であり、神が許容されておられるがゆえに悪魔は存在しているからです。そしていつまでも存在しているのはなく、やがて最後の審判の後に永遠に滅ぼされる裁きの宣告も下されているわけです。

神の許容の中でヨブを訴えたサタンの働きは、これもサタンの基本的な姿勢だと思われます。黙示録12:10 わたしは、天で大きな声が次のように言うのを、聞いた。「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。我々の兄弟たちを告発する者、／昼も夜も我々の神の御前で彼らを告発する者が、／投げ落とされたからである。」このように、人を訴え、告発する働きこそ悪魔の中心的な働きだと思われます。それゆえヨブを訴えたサタンは「中立」などではなく、神への反逆行為そのものです。なぜなら、神が愛するヨブを訴え、告発し、苦しめ、悩ませ、罪を犯させようとすることを通して、結局は神を苦しめようとしているからです。

悪魔が主に訴えることができる法的な根拠は人間の罪です。

人間も神に反逆する。神を愛する人間などいない。

神が自分たちを滅ぼそうとするなら、神に勝つことなどできず、その命令にそむくことすらできないので、神が愛する人間をも同じ滅びに引きずり込むことによって神を苦しめようとしているのです。

しかし御子の受肉とあがないによって、悪魔の人を訴える法的な根拠はなくなってしまったのです。

悪魔や天使に「中立」というカテゴリーが存在するとは。私にはどうしても思えないのです。

□31 「中性化」について

[山谷](#) - 2004/03/20 08:05 -

英語の神学書などを読むと、ニュートライズされた、という表現が使われています。それで、日本語には「中性化」としました。

中間領域の天使的勢力が、キリスト以前は神に対して「敵対」していたわけですが、もちろん、すべての天使的勢力が敵対していたわけではなく、神に対して「従順」であるか、「敵対」しているか、あるいは、「中立」を保っているか、この三つのカテゴリーに天使を分類できるのではないかと思います。

旧約聖書を見て面白いと思うのは「主からの悪霊」や「神の許可のもとにヨブを苦しめるサタン」という概念が出てくることです。上記の図式に当てはめて考えるなら、神に「敵対」して悪霊化した天使が、それでもなお、中間領域における天使的秩序の一部として、神から与えら

れた使命を遂行しているように思われることです。この場合、神に「敵対」している天使であっても、神から下された命令に不承不承であっても（いやいやながらであっても）従わざるを得ず、敵対している者であるのに、神からの使命を遂行することになります。このような状態を「中立」と呼べるのではないかと思います。「主からの悪霊」という、現代人には理解し難い概念も、このように考えるなら、論理的に筋が通るかたちで理解することが可能になります。

さて、神に「敵対」する天使的勢力は、キリストの十字架と復活の勝利によって、打ち破られて、武装を解除されてしまいました。現代の軍隊の用語では、敵を武装解除することは、敵を殺傷して無力化することも含めて「ニュートライズする」と言います。キリストの勝利は、天使的勢力をニュートライズした、という表現は、「天使的勢力を中性化した」とも「天使的勢力を殺傷して無力化した」とも、取ることが可能です。しかし、聖書は、キリスト再臨のときに天使的勢力が滅ぼされるとコリント書で言っているのですから、殺傷して無力化したのではなく、むしろ「中性化した」という表現を取る方が適切なのではないかとわたしは考えます。

さて、神に「敵対」していた領域主権の天使は、キリストの十字架と復活によって打ち破られ、中性化され、キリストに対して従属させられました。つまり、位、主権、支配、権威といった国家権力の天使は、中間時（初臨と再臨の間）においては、「キリストに従属する奉仕者」として、不承不承ではあっても（いやいやながらではあっても）キリストに仕えさせられているのです。つまり、打ち破られ、中性化された天使的勢力は、キリスト再臨によって滅ぼされるまでは、引き続き神から委ねられている領域主権を統治し続けるということです。これが、中間時の中間領域です。

このパラダイムを、日本にあてはめるのであれば、鎌倉幕府であれ、徳川幕府であれ、戦前の大日本帝国政府であれ、戦後の日本政府であれ、いずれも「キリストに従属する奉仕者」として、善を勧め、悪を罰するという、神から委任された領域主権による統治を行っている、と捉えることができます。

この場合、キリスト者は、鎌倉幕府に対してであれ、徳川幕府に対してであれ、日本政府に対してであれ、等しく「神によって立てられた天使的秩序」として、その正当性を承認し、諸法度であれ太政官布告であれ、いかなる法であっても、その法を遵守し、課せられた義務（市民の義務であれ、臣民の義務であれ、領民の義務であれ）を忠実に果たし、税を納め、命令に服するのです。これは、キリスト者の「中間倫理」（終末論的倫理）として、ローマ13章で命じられていることです。

ただし、領域主権の天使が、その「中性化」された状態を自ら脱して、悪鬼的性格を顕現させた場合においては、キリスト者は生命を捨てても国家権力に抵抗します。その場合とは、国家権力が偶像礼拝を命じる、あるいは、キリストを否むよう命じる、というような場合です。これにより、徳川幕府のキリシタン禁教令に抵抗して殉教したキリシタンの行動は、中間倫理に照らして「正しい判断」であったということが出来ます。

しかし、このような場合の抵抗は、偶像礼拝などキリスト者の良心に照らして問題となる、政府の命令の特定の部分に対してだけに限定されます。つまり、「偶像礼拝を行え」と命令する悪鬼化した国家権力に対しては、キリスト者は命を捨てても「偶像礼拝を拒否」しますが、それ以外の国家の命令あるいは国家が課す義務に対しては、キリスト者は忠実に服従するべきであると考えます。つまり、領民、臣民、市民として、すべての法を遵守し、税を納め、課せられた義務を果たしつつも、なお、「偶像を礼拝せよ」という命令の一点においては抵抗し、そのためには殉教も辞さない、ということです。

27 中性化に対しての御言葉

kamekame - 2004/03/19 22:36 -

山谷先生が中性化されたとしてあげておられる御言葉として

コロサイ2:15ですが、

これは、この世を支配するものが、支配の法的根拠がなくなった
という意味に理解していました。

ニールアンダーソンはこの状態を、
アメリカ奴隷制度がリンカーンによって法的に廃止されたが、
その事実を知らない奴隷たちに、その事実を知らせずに奴隷のまま
束縛しようとしていた人に例えています。

すなわち、サタンの支配から完全に解放されているという事実を
クリスチャンが気づかずにいる間は、サタンはクリスチャンを支配でき
るということだそうです。

私もそのように理解していました。

山谷先生のおっしゃる「中性化」が理解できずにいます。

私は再建主義者ではなく、その論争の趣旨からははずれるかもしれませんが、この論争に興味
深く読む中で、このことが気がかりになってしまいました。

26 中性化ってなんですか？

kamekame - 2004/03/19 22:26 -

山谷先生、いろいろと教えてくださりありがとうございます。
とても勉強になります。さらにお聞きしたいのですが、

「6.キリストの十字架と復活の勝利によって、天使的勢力は打ち破られた。こうして、神に敵
対する「国家権力＝天使的勢力」は、武装解除され、中性化された。」

中性化されたとはどういう意味なのでしょう？、

何と何との「中性」なのでしょう？

一般的には酸性とアルカリ性との「中性」とか、

男性にも女性にも使える服など「中性」とか使いますよね。

善でも悪でもないという意味での「中性」なのですか？

神にでも、悪魔でもないという意味での「中性」なのですか？

中性になったのでしたら、もう「悪魔」や「悪霊」ではなく

「中魔」か「中霊」なのでしょう？

何か、考えれば考えるほどに頭がこんがらがってくるような気がします。気になって夜も眠ら
れません。

ダニエル書の霊的戦いの個所からは、

明らかに、善と悪、神に使える天使と、神に反逆する悪魔、悪霊との

戦いのように思えます。悪魔にもつかない、神にもつかない

中性の霊的存在っているんでしょうか？

25 サタンとしての再建主義

ソソ - 2004/03/19 21:57 -

再建主義に関しては「正統主義という羊の皮をかぶった狼」だということができるでしょう。異端はすべて、少なくとも見かけ上は、聖書を根拠にしています。しかし、その教えは誤りに満ちています。同じように再建主義も、カルヴァンなどの正統主義を根拠にして話を進めますが、その教えは誤りに満ちているのです。そして、どこの国民であっても、この教えに生きる人は、結局混乱した不幸な人生を歩むのではないのでしょうか。再建主義は、かつての共産主義者たちのように、もっともっと悪い教えを生み出すに違いありません。そして神学的な内ゲバが起り、クリスチアンの支持を失い、最後には自壊するはずです。それは神の創造にも自然にも反した思想が、あまりにも多いからです。そういうものは、長続きしないものなのです。なぜ、ロバート・シュラーが成功したのか？それは、彼の思考が神と調和していたからにほかなりません。

24 毒麦としての再建主義

ニューソート・レリジョン - 2004/03/19 21:33 -

今、プロテスタント・キリスト教は「再建主義」として多くの膿を排出しているのでしょうか。再建主義は、聖書から出てきた排泄物であり、毒麦であります。毒麦が刈り取られることによって、キリスト教は浄化されます。そして、ディバイン・サイエンス教会の牧師であったJ. マーフィーの神学こそが、ホンモノであることがさらに明らかになるのです。

23 聖書にみる中間領域の概念[山谷](#) - 2004/03/19 19:04 -

ミレニウム主宰者の富井氏も、ここに至ってようやく、領域主権と天使的勢力についての形而上学的関係について、気付かれたようです。

>ダニエル書に「ペルシアの国の君」という表現があります。「ペ
>ルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、
>そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれた
>ので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき...」
>(ダニエル10・13)
>この「君」は霊的な存在、つまり、悪霊です。これについてあま
>り気にしてなかったのですが、ハッと気付いたのは、「すべての
>民族や国民の上にこのような霊的君主がいるのではないか？」
>ということです。たとえば、「北朝鮮国の君」とか「アメリカ国
>の君」とかが。サタンは部下の悪霊を任命して、それぞれの国
>を支配させているのではないか。

聖書について、ここまで正しい理解をされたのであれば、再建主義論争での「要点」となっている、「中間領域」の概念についても、きっと納得して頂けるのではないかと、期待しています。

領域主権、あるいは、国家権力がどのように設立されたのか、聖書の最初のページから繰って調べて行くと、次のように記述することが出来ます。

1. 自然と恩寵が完全に調和していた状態であった人間が、墮罪したことにより、自然と恩寵が分離した。

2. 分離した自然と恩寵との間に、緩衝地帯として「ケルビム」（天使的勢力）と「剣」（国家権力）を、神が設定した。

「エデンの園の東にケルビムと、きらめく剣の炎を置かれた」（創世記3:24）

3. 神は、ケルビム（天使的勢力）に剣（国家権力）を委任し、地球の表面を分割して「領域主権」（位、主権、支配、権威）を設定した。これが、国家の起源である。

「いと高き神が国々に嗣業の土地を分け
人の子らを割りふられたとき
神の子ら（天使的勢力）の数に従い
国々の境を設けられた」（申命記32:8）

4. 領域主権を担う天使的勢力の一部は、墮落して、悪鬼化した。こうして、国家権力の悪鬼的性格が顕現するようになった。

「神の子ら（天使的勢力）は、人の娘たちが美しいのを見て、おのおの選んだ者を妻にした」（創世記6:2）

「自分の領分（領域主権）を守らないで、その住まいを見捨ててしまった天使たち」（ユダ6）

5. 領域主権を担う天使的勢力は、あからさまに神に対して反抗する。

「ペルシアの天使長」「ギリシアの天使長」（ダニエル10:20）

6. キリストの十字架と復活の勝利によって、天使的勢力は打ち破られた。こうして、神に敵対する「国家権力＝天使的勢力」は、武装解除され、中性化された。

「もろもろの支配と権威の武装を解除し」（コロサイ2:15）

7. しかし、中間時（キリストの初臨と再臨の間）においては、まだすべての被造物が「自然と恩寵との調和」へともたらされていないので（キリストによる救済に与っていないので）、「善を勧め、悪を罰する正義の執行者」として、引き続き天使的勢力が領域主権を担い続ける（つまり、国家権力は存続し続ける）。

「この世を支配する者、かの空中に勢力を持つ者」（エフェソ2:2）

8. キリスト者は、もはや「この世」には属しておらず、宇宙的な「キリストのからだ」に属する者である。また、キリスト者は、キリストと共に天の御座に着けられており、「天使をも裁く者」とされている。しかし、中間時（初臨と再臨の間）においては、キリスト者は国家権力に対して服従し、すべての法を遵守し、市民として果たすべき義務を全っとうししなければならない、と命じられている。これが「中間倫理」（終末論的倫理）である。

「権威者はいたずらに権を帯びているのではなく、神に仕える者として、悪を行う者に怒りをもって報いるのです」「良心のためにも、これに従うべきです」（ローマ13:4）

9. 領域主権を担う天使的勢力（位、主権、支配、権威）は、キリスト再臨に際して滅ぼされ、キリストは領域主権を取って、父なる神に返される。そして、キリストは、最後の敵である「死」が滅ぼされるまで、千年の間、キリスト自ら地上を直接統治する。

「世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます」（コリント15:23）

以上が、聖書に見る「中間領域」（天使的勢力が支配する領域主権）の概念です。

■16 kamekameさまへ（2）

山谷 - 2004/03/18 13:05 -

これに対して、「司法律法を現代社会に適用する」ことを政治的アジェンダに掲げている再建主義者、つまり、中間領域を満たしているのは天使的勢力ではなく、自律的なヒューマニズムであると見ている再建主義者は、「方便説」「神話説」「非パウロ説」のいずれかを論拠として、反対論を展開するのでなければなりません。

しかし、方便説については、再建主義者は「現時点におけるサタンと悪霊の实在」を信じているわけですから、使えません。

さらに、神話説については、再建主義者は「リベラル神学はサタンの」と主張しているわけですから、使えません。

そうして、非パウロ説については、再建主義者は「逐語靈感を信じるファンダメンタリスト」であるわけですから、使えません。

それゆえ、「中間領域という新約聖書の世界観的パラダイムは実在している」とするわたしの主張を破るには、再建主義者は相当苦労しなければならないはずです。

ところで、もし再建主義者が「中間領域」という防衛ラインを突破するような事態が起きたとしたら、わたしとしては、防衛ラインを、次の「一般恩恵」まで後退させるつもりでいます。国家権力は中間領域の天使的勢力と不可分一体であると見る神学説が破られるようなことがあったとしても、「神が人類に普遍的に与えた一般恩恵によって国家、政治、経済、社会、文化が成立している」と見る神学説をもって、再建主義に対抗することが出来るのです。

この場合、カルヴァンが一般恩恵と自然法を採用していますから、この防衛ラインを破るには、再建主義者はカルヴァン自身を論破しなければならないことになります。

再建主義者は「カルヴァンに対して最も忠実であることを自負する自称正統カルヴァン主義者」なのですから、その再建主義者がカルヴァンを論破することは、非常に困難を極めることでしょう。つまり、この防衛ラインを突破することがもしできることでもあるとすれば、その時には、再建主義者はもはや、カルヴァン主義者でも改革長老派でもなくなる。現代における「新神学説」であることが決定する、ということなのです。

■15 kamekameさまへ（1）

山谷 - 2004/03/18 13:02 -

中間領域については、コロサイの信徒への手紙とその注解書を学ばれるとよいと思います。フランスコ会訳新約聖書は、詳細な脚注が付されていて、参考になります。

コロサイの教会ではグノーシス的な異端思想と後期ユダヤ教の神学概念が結びついた教えがはびこっていました。そこで、パウロは手紙を書いて異端説を反駁したのです。この手紙に、いわゆる「中間領域」と呼ばれる概念が現われています。

パウロの執筆意図に対しては、聖書学者の間ではおおまかに言って、次の四つに意見が分かれています。

1. パウロは天使的勢力の存在を信じていなかったが、グノーシス／後期ユダヤ教神学説に反

論するために、天使的勢力という概念を便宜的に借用した。それゆえ、天使的勢力が実在するわけではない。これを裏付けるかのように、パウロはコリント書で「悪霊は存在しない」と言明している。（方便説）

2. パウロは天使的勢力の存在を信じていたが、グノーシス／後期ユダヤ教神学説に反論するために、キリスト集中論的天使論（キリストによって創造され、キリストによって保持され、キリストに対して奉仕し、キリストによって打ち破られ、キリストによって中性化された天使的勢力）という新たな概念をもって置き換えた。それゆえ、天使的勢力は実在している。これを裏付けるかのように、パウロはコリント書で「キリスト再臨において天使的勢力が滅ぼされる」と言明している。（実在説）

3. パウロは天使的勢力の存在を信じていたが、グノーシス／後期ユダヤ教神学説に反論するために、キリスト集中論的天使論（キリストによって創造され、キリストによって保持され、キリストに対して奉仕し、キリストによって打ち破られ、キリストによって中性化された天使的勢力）という新たな概念をもって置き換えた。しかし、このパウロの考え方は、古代人の神話的・迷信的世界観に基づくものであるから、現代人には通用しない。それゆえ、非神話化して、実存主義的解釈を提示しなければならない。つまり、天使的勢力は、現代人にとっては存在しない。（神話説）

4. コロサイの信徒への手紙は、パウロの著作ではなく、初代教会に蔓延した異端に反駁するために、後代の教会指導者が便宜的にグノーシス的・後期ユダヤ教的世界観を借用して書いた偽作である。それゆえ、コロサイの信徒への手紙は、パウロ神学の中に入れるべきではない。偽作者の考え方は、初代教会における信仰の在り方を示しているものではあるが、古代人の神話的・迷信的世界観に基づくものであるから、現代人には通用しない。それゆえ、非神話化して、実存主義的解釈を提示しなければならない。つまり、天使的勢力は、現代人にとっては存在しない。（非パウロ説）

以上の四つの説のうち、現代の教会は大多数が「方便説」「神話説」「非パウロ説」を採用しています。これは主流派諸教会、あるいはリベラル派諸教会の見解と言ってもよいでしょう。

これに対してファンダメンタリストは、宗教改革者が神学の体系から天使論を事実上除去してしまったことにより、「中間領域」や「天使的勢力」についての定見がほとんど、あるいはまったくない、というのが現状でありましょう。

しかし、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、徹底的終末論のシュヴァイツァー、新約聖書の終末論的性格に着目したブルトマン、救済史的神学のクルマンらによって、「初臨と再臨の間である中間時と、中間勢力（天使的勢力）と、中間倫理（終末論的倫理）」が、新約聖書の緻密な研究から明らかになってきました。

この研究により、新約聖書が執筆された当時の著者及び受け手側が、新約聖書に記された神学概念をどのように理解していたかが明らかになって来たのです。

これは、終末論的神学や弁証法神学の挙げた成果だと言えます。しかし問題なのは、「新約聖書に記された神学概念は、そのままでは現代人に通用しないので、古代の神話的・迷信的世界観の文脈から、現代人にも理解できる実存主義的解釈へと翻訳しなければならない」（非神話化）とされている点です。

ファンダメンタリストは、この「非神話化」という最後のプロセスを省略することによって、新約聖書神学の挙げた世界観を、そのまま「新約聖書の世界観的パラダイム、すなわち、実在する世界のパラダイム」として、利用することが可能になるわけです。

これが、わたしの用語である「リベラル神学はファンダメンタル神学の下女であること、アリストテレス哲学のスコラ神学に対するがごとし」という、方法論です。この方法論に立ち、わたしは「実在説」を採用します。

■14 中間領域ってなんですか？

kamekame - 2004/03/18 06:43 -

「二分化されている世界を、神の側か悪魔の側かという分け方でわたしは捉えない。」

それはそうですね。

悪魔も被造物であるわけですし、神の許容された範囲内でしか活動できないし、最終的には完全な裁きと敗北に定められているわけですね。

すべては神様が完全に支配されて、すべてを役としてくださることを信じています。

私は再建主義者でもないんですが、この論争を興味深く読んだものです。中間領域ってなんなのか教えてもらえれば幸いです。

天使と悪魔と悪霊以外に何かいるのですか？

中間の存在っているんですか？

また、天使も人間みたいに、罪や肉や誘惑に悩んだりするんですか？

こんな質問がこの掲示板の趣旨にそぐわなければ言ってください。
そうでなければ教えてください。

■13 二分化のされている世界

工兵 - 2004/03/18 00:34 -

二分化されている世界を、神の側か悪魔の側かという分け方でわたしは捉えない。

それは、世界全体は神によってもたらされているからである。

罪の意識が増すとき、神の恵みへの感情も増すように。

闇があるゆえに、光の尊さを知ることができた。

悪や自己の罪を明確に認識したとき、それは同時に神による善と潔さを認識し始めたことを意味するだろう。二分化された世界とは相対的な世界ではないか。悪が必要であったのではなく、悪が現れたことで善なるものが際立ったのだ。

当然、神の恵みを得るために、率先して罪を犯すということではない。ローマ6:15-16にあるように、何に人が服従しているかで、そのものが罪の僕か、神の僕かということがいえよう。それをどちらの側につくかという言い方もできるが、当人はその認識を明確にはもたない。

もし自己の覚醒がなされたならば、神に立ち返り服従することも当人は意識しはじめるはずである。

しかしローマ7章にあるように、神への服従と反逆の混在した人間の弱さをみることができる。その状態とはどちらの側に人がついているかというたぐいのものではない。人の心中が霊的パラドックスの状態で整合されてしまっているのだ。

またこれは、不明瞭な中間領域というものでもない。なぜなら、明らかにこのもののパウロは、神の義を意識している。

このものは、神の義の中にあり、喜んでおり、一方で罪のとりこにもなっていることを悲しんでいる。

このようなものを救うことができるのは、主イエス・キリストによるほかはない。

再建主義者が公開処刑を是認しているようであるのならば、「主イエス・キリストによる赦し」とは何であろう。

わたしたちは御子の誕生以来、律法の下にはなく、赦しの恵み、神の恩寵の下にある。

神の国は、御子が玉座に座られ、御子のみが裁きの審判をされるところであろう。

そしてこの御子はまた、姦淫の罪を犯した女を視られなかったお方でもある。

□12 中間領域

kamekame - 2004/03/17 21:18 -

私は再建主義者ではなく、神学的な専門家でもなく、ただのクリスチャンですが、質問です。

「（２）神が中間領域として設置した天使的勢力」

これは、神に仕える、いわゆる天使と、神に反逆する、いわゆる悪魔や悪霊に二分割されると思っていました。
すなわち、神の側につくか、悪魔の側につくか、明確に二分されるのではないのでしょうか？

それ以外の中間の霊的存在っているんですか？

□11 中間領域について

[山谷](#) - 2004/03/17 11:06 -

工兵さんへ>

中間領域がもし存在しないのだとしたら？ 中間領域は真空であって、そこには自律的なヒューマニズムが満ちているのであるなら？

おそらく、再建主義者との論争は、最終的にはすべて、この一点に行き着くであろうと思っています。

もし、中間領域が存在しないか、あるいは、真空であるのなら、論理的には、再建主義者の主張が正しい、ということになるのです。

仮に、再建主義者が、（１）カルヴァンの言うような意味での自然法が存在しないこと、（２）神が中間領域として設置した天使的勢力が存在しないこと、この二つを聖書に基づいて神学的に証明することが出来たならば、再建主義が正しいということを、私は認めざるを得ません。

その次のステップとして待っているのは、「旧約律法は刑罰法として現在も有効かどうか」と

ということです。このステップでの議論にもし負けてしまったら、論理的には、再建主義の主張が全面的に正しい、ということになってしまいます。もう後はないのだ、ということです。

この最後の防衛線まで破られたなら、「同性愛者、墮胎者、姦通者、親を殴る子ども、常習的犯罪者、等々」を公開処刑しなければならないと主張する再建主義に対して、わたしはその論理的正当性を、たとえ嫌々ながらであったとしても、承服せざるを得なくなってしまいます。

ですから、この戦いはすべて「一般恩恵と中間領域」という、一点にかかっていると言っても過言ではないでしょう。

それを「ある」と言うか、「ない」と言うかで、キリスト者が目指すべき社会や国家や司法の形態が、ユートピアにもなり、ディストピアにもなるのです。

☐ 9 中間領域？

工兵 - 2004/03/17 00:15 -

中間領域と言われる世界は実在するのか。

全く清いお方の視点があるゆえに、「神の裁き」があるということ
を厳粛に受けとめなければならない。またそれゆえに、愛の赦しがある。

ヨハネ8:1-11からは、イエスが女を視ようとされなかったことから、自身が神の審判をこの地上で顕現されるのを、愛をもって拒否されたということを知ることができよう。

世界が二つに分けられているということを、どう受けとめようか。

しかし、二分化されている世界の中で、感情による拒否と、もしくは従順の道があり、神の国建設という大目標に向かってそれぞれ固有の足で歩む。

聖別されるということは、個々固有の潔さにあずかるということであろう。

天使の存在領域として特定な中間領域を抱くよりは、御霊の内住が現実としてあるように、天使においても、人と同じ場の共有を得られることができると理解することは、容易いだろう。

主が共におられるという信仰は中間領域のものではない。
同様に天使においても言えるであろう。

個々の潔さについて抱く、個々の曖昧さは、神もしくは天使との同じ視点共有をすることの欠如によるのではないか。

野の花を見なさい、と言うとき、神もその花を見ている。
おことばどおりになるようにと祈ったマリヤを見ていた天使は、
同じように祈る、今のわたしたちも見ているだろう。

☐ 8 二契約論 v s 非二契約論

[山谷](#) - 2004/03/16 13:02 -

予想していたように、パーシャルプレテリズム派の内部において、現在、二契約論再建主義vs非二契約論再建主義の議論が進行中の模様です。

二契約論再建主義は、すでにフルプレテリズム派に対してアナテマを行ったわけですが、「二契約論vs非二契約論」の議論も、その経過次第では、二契約論再建主義が非二契約論再建主義に対してアナテマを行うことになりかねないでしょう。

さて、二契約論再建主義の主張展開に対して、わたしは次の点について問題意識を持ちました。

二契約論再建主義は、あくまで「業の契約」と「恵みの契約」という二項対立の図式を保持する姿勢を強調しています。これは、スープララプラサリアニズム（墮罪前予定説）である二重予定説を採用していることにより、世界内に「自律の領域」を確保するためには、アダム契約はあくまで「業の契約」でなければならないとする、論理的な必然性に強いられているものです。

ところで、二契約論再建主義は、イエス・キリストを「恵みの契約の唯一の代表者」として捉えることにより、イエス・キリストを「恩寵」の概念範疇の中へと完全に取り込んでしまいました。

これによって、「受肉において自然と恩寵が調和された」と見る、「自然vs恩寵のキリスト論的解決」という真理契機が、二契約論再建主義においては、失われてしまう危険性が出て来ます。

そのラインで進むとなると、結果的には、二契約論再建主義のパラダイムにおいて、「業の契約」にすべての自然が収束され、「恵みの契約」にすべての恩寵が収束されて、「自然vs恩寵」の直接対決の構図が全面的に展開されることになるのです。この二元的思考の枠組みが保持され続けるのであれば、フランシス・A・シェーファーが指摘した、「自然が恩寵を食い滅ぼす」「理性への絶望」「理性からの逃走」という展開が、ほぼ必然的に導き出されて来ることになると思われます。

それでは、二契約論再建主義において見られる「自然に食い滅ぼされた恩寵」とは、具体的にどのような事柄なのでしょう？

代表的な例が、ヨハネによる福音書第8章1節から11節のテキストです。通常のキリスト教会なら、この箇所を「恵みによる罪の赦し」を教えていると解釈し、「恩寵」のカテゴリーに入れます。

しかし、再建主義は、当該部分は原典に存在せず、後代の加筆に過ぎないと主張し、百歩譲って、当該部分が原典に存在していたと仮定しても、この本文は「恵みによる罪の赦しを説いているわけではなく、女を姦通罪と推定するに足る十分な数の証拠・証人に不足しており、かつ、姦通罪における原告となる夫の側が、告訴を断念したことから、イエスは『法的な不起訴処分』を取ったに過ぎない」と、主張するのです。

これを見ますと、シェーファーが言う「自然が恩寵を食い滅ぼす」という論理的帰結が、「聖書の本文をも食い滅ぼしてしまう」という、恐るべきかたちで現実のものになっていることが、わかるでしょう。

上記のようにして、再建主義の思潮においては、「恩寵」の部分がことごとく自然によって食い滅ぼされ、最終的には、キリスト者の信仰の目標が「墮胎者の公開処刑を政治的アジェンダ

に載せて、司法改革運動・政治運動・ロビー活動をする」というような、恩寵の世界とは対極に位置するような姿へと、変わって行ってしまうのです。

さらに、富の獲得の障壁となるあらゆる障害（国家権力による経済活動への法的・政治的規制）を完全に撤廃し、富の蓄積を飛躍的に進めることによって、キリスト者に与えられた祝福を「神の栄光」として表すという、「資本に置き換えられた恩寵」すら、登場して来るわけです。これは、アメリカ型ピューリタニズムの最終形態と見る事が出来るでしょう。

■6 一部は全体、そしてメタファー

工兵 - 2004/03/16 00:08 -

アダムによってイマゴ・デイが損なわれ全人類に及ぼしたということは、人は個として存在し得ず、共同体としてのみイマゴ・デイが全的であるということ、意味するだろう。

それゆえに人は人間という。人は神を全て知り理解し得ないので、イマゴ・デイを理解する方法は、メタファーとしての神を知るほかない。

神のメタファーそのものとして顕現されたのは他にもないイエスである。そしてこの神のメタファーはスプラUNKニゾマイのお方でもあった。

人が人間としてイマゴ・デイを獲得するということは、同じメタファーとしてのスプラUNKニゾマイのお方を知ることでもある。

神のメタファーは痛まれたこと。

人は他者の痛みをしらなければならない。

■5 カルヴァンの国家観

[山谷](#) - 2004/03/15 14:14 -

カルヴァンは、教会と国家の関係を、どのように考えていたのでしょうか？ そのヒントが、エミール・ドゥメルグ著『カルヴァンの人と神学』の脚注に、次のように記されていました。

カルヴァンは市民社会と政治社会との自主性（独立性）を固く確立した。国家、社会、政治、科学は、それらが一般恩寵の賜物であるがゆえに、神から自立したものではない。しかし、神のもう一つの賜物、もう一つの制度である教会からは自立している。

「カルヴァンの恩寵概念についての会議」における
ユジェーヌ・ショワジーの講演より

上記を見ましても明らかなように、改革派神学・カルヴァン主義の体系においては「神が一般恩寵によって与えた普遍法である自然法」及び「神が一般恩寵によって設立した制度である国家、社会、政治、科学」とが、聖書啓示に直接依拠しない、独立した法領域・制度として存在する場所を持っていることが、わかります。

「直接聖書に依拠していないが、神ご自身が設置され、聖書自体とは矛盾するものではない」という意味では、一般恩寵に支えられた自然法と国家は、救済史的な神学における「中間時の中

間領域」の考え方と、パラダイムの非常に類似しています。

類似しているだけでなく、アブラハム・カイパーの「領域主権」という概念を、新約聖書神学の「位・主権・支配・権威」とリンクさせるならば、両者のパラダイムは同一である、と言ってもいいでしょう。このあたりは、国家・民族・宗教・文化の多様性と天使的勢力の関係について述べた、第二世紀の初代教父、アレクサンドリアのクレメンスの世界観的パラダイムを彷彿とさせるものがあります。

しかし、再建主義は、一般恩恵を否定し、自然法を否定し、さらに、中間領域は真空である、とするのですから、その論理的帰結は「聖書啓示に立脚して国家、社会、政治、科学を構築しなければならない」ということになるのは、ある意味で、当然でしょう。

問題なのは、再建主義者は、ヤコブ・アルミニウスやグロティウスどころか、当のカルヴァンさえも、自分たちの仲間と見なすことはできない、ということなのです。

自分たちは、ウェスレアン・アルミニアンとは関係がない、と宣言するのは結構ですが、自分たちはカルヴァンとも関係がない、と宣言するのでなければ、本当の再建主義者の論理的立場は、担保され得ないのです。

□4 天使はカップ麺を食べない

工兵 - 2004/03/14 17:32 -

天使について、少しふれてますなあ。

人も時には、神から使わされたものとなりますが、天使と異なるところは、日常の「シガラミ」のあることです。これは肉体とも言えますが、この「シガラミ」からの解放を求めることは、人の人生で一生つづくわけです。

しかしまた「シガラミ」を受容していきながら「解放された喜び」もそこに存在するでしょう。そして天使は「シガラミ」がないゆえに「解放された喜び」を体験できない。

万物の原理の中で、創られたものは、「従う」ということは当然であり、自然な法則の中にあるのですが、理性は、神を頼らないという行動によって、「従わない」ということを表明するのですな。

サタンは神に従わなかった。それは神を敬わなかったからであります。人の場合、神を見ることができないので、神の存在を信じる、信じないということがありますが、それよりも前に、神なる何ものかに対する畏敬の念への服従が、その人の品性を整えさせるのではないかと。

鯛の頭も信心とは、迷信ではありますけれども、そこに人の側の自分を低くして寄り頼む姿は、決して慚然とした姿ではございませんなあ。

わたしたちは、時には克己の念をもって、カップ麺を食べる恵みを与えられていて、それによってもたらされた一握りの恵みを、隣の人に渡すことができるであらう。

しかし、天使はカップ麺を食べないのだ。

■3 カルヴァンは再建主義者になり得ない

[山谷](#) - 2004/03/14 12:21 -

工兵さまへ> 『再建主義大論争を回顧する』のページは、WindowsXPで製作しましたので、他ブラウザでの表示チェックを全然していません。マック以外のブラウザでも問題が多分起きるだろうと思います。ご宥恕ください。

さて、「カルヴァンと自然法」の問題についてです。

カルヴァンは、「一般恩恵」を支持していたことで知られていますが、「自然法」については、次のように述べています。

十戒の二枚の板に啓示されている律法は、「自然法」の想起に過ぎない。「自然法」というものは内的なものである。

「それは各人の心にしるされ、ほとんど刻み込まれているのである」しかし、罪ある人間は「混乱させ」られている。

そこで神は、「自然法の中ではあまりに不明瞭にされていたものについて、もっと確かな証言をわれわれに与えるために、彼の書かれた律法」をお与えになった。

『キリスト教綱要』2編8章

上記を見る限り、「神から（異教徒を含めた）全人類に普遍的与えられた『自然法』が、まず先在していて、その『自然法』を明文化したものが、旧約律法である」という当時の神学界の一般的な考え方を、カルヴァンもまた支持していたことがわかります。

このカルヴァンの考え方が、第2スイス信条12：1や、ウェストミンスター信仰告白に反映されているのです。

よって、カルヴァンと再建主義とは、歴史的に非連続であるということが言えます。さらにまた、ウェストミンスターに毒麦が混じっていると言うのであれば、そもそもカルヴァンにも毒麦が混じっていたのだ、と言わなければならないことになります。

■2 流れるような思考

工兵 - 2004/03/14 01:17 -

自宅のマックで見たら、文字ずれて流れてたよ。
なんかならんかい。

■1 ふむふむ

工兵 - 2004/03/12 15:30 -

ざあっと、眺めたよ。
じっくり、これから読ませて頂ます。

眺めながら、ふと
ローマ書 5 章 1 2 節と、
救世軍教理 9 条が、浮かびましたなあ。

[「再建主義大論争を回顧する」へ](#)